

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	福山 寛志
論文題目	乳児と大人の相互作用における共有経験の理解に関する発達研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、乳児が大人との相互作用の中でどのように大人の行為や心的状態を理解するようになるのかについて、実験的手法を用いて検討したものである。本論文は、全5章から構成される。</p> <p>第1章では、相互作用においてみられる乳児と大人の行動特徴とその発達的変遷を概観するとともに、他者の視点や行為意図の理解等、乳児期の社会的認知発達との関連について検討した。さらに、これまでの研究の問題として、乳児と大人の相互作用における双方向性が看過されてきた点を指摘し、本論文で検討すべき問題を吟味した。</p> <p>第2章では、1歳前半児34名、後半児28名を対象に、子どもが大人の反応に応じてどのように指さしを調整するか、また、大人と共有した経験を理解する能力とどのように関連するかについて検証を行った。1歳前半児の多くは大人の反応によらず指さしを継続したのに対し、後半児の多くは大人が指さした対象に視線を向けた途端に指さしを止めた。指さしの調整反応と共有経験理解との関連を調べたところ、大人の反応に応じて指さしを止めた児は、大人と共有した経験を理解していた。1歳前半から後半にかけて自己視点を越えた他者視点の理解が進むこと、その背景には他者との共有経験を理解する能力が関与することが明らかとなった。</p> <p>第3章では、大人による社会的な行動シグナルが、乳児の模倣行動に与える影響を実証的に検討した。第1節では14ヶ月児22名に対し、笑顔、アイコンタクト、オノマトペといった社会的シグナルを付随させた目的指向的行為を児に呈示した。その結果、それらのシグナルが行為の最終目的以外の側面(行為スタイル)に付随していると、児は行為のスタイルを模倣した。第2節では14ヶ月児22名に対し、社会的シグナルに代わり、物理音を行為の最終目的以外の側面に付随させた。その結果、児は行為スタイルのほうを模倣することはなく、大人の社会的な行動シグナルが14ヶ月児の模倣行動に影響を与えることを明らかにした。</p> <p>第4章では、養育者と乳児の相互作用時の行為の時系列関係について検証した。第1節では11～13ヶ月児とその養育者46組を対象に、養育者が入れ子のカップを重ねる物体操作(入れ子課題)を乳児に見せる場面をモーションキャプチャにより計測した。その結果、乳児が入れ子課題を達成しようとした時、養育者は自らの行為の誇張度を減少させた。他方、乳児が入れ子課題達成に失敗する、あるいはほか</p>			

の操作を行っているとき、養育者の行為の誇張度は増加した。さらに、養育者の行為の誇張度の増加量が大きいほど、乳児はその後入れ子課題を達成した。第2節では、入れ子課題達成に必要な手指微細運動能力がまだ未熟な6~8ヶ月児とその養育者40組の相互作用場面を同様の手法で計測したが、養育者の行為の誇張度に変化はみられなかった。以上より、養育者は、ある行為を学習できる潜在能力を乳児がもつかどうかを即時的に判断しながら、対乳児行為を調整している事実が明らかとなった。乳児と養育者は双方向的に影響しあいながら相互作用を持続させていること、それは乳児の学習機会獲得につながっていることが示唆された。

第5章では、自らによる実証研究からの新たな知見を整理するとともに、乳児—大人の相互作用の特徴、ならびに乳児期の社会的認知発達との関連について理論的考察を行った。乳児—大人の相互作用の特徴のひとつは、乳児に対する大人の誇張的働きかけである。ただし、その働きかけは乳児の行動により引き出されるものである。こうしたヒト特有の双方向的なやり取りを通じ、乳児は言語を獲得する以前から大人と行為を共有する経験を蓄積し、その過程で行為の背後にある心的状態を自分のものとは区別して推測する能力を発達させる可能性を指摘した。今後の課題として、乳児—養育者の相互作用パターンの多様性が社会的認知予後に与える影響の検証を目指した縦断研究や、乳児期の他者理解にかんする神経系基盤の解明、他者理解能力の発達にかんする定型、非定型性の検討等を挙げた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、他者との相互作用を通じ、ヒトがどのように他者の意図などの心的状態を推測、理解する能力を獲得していくかについて、その認知発達過程を解明しようとしたものである。言語によらない乳児—大人の社会的相互作用場面に着目し、両者の行動や心的状態が互いにどのように影響をもたらすのかを5つの研究を通じて実証的に明らかにした上で、他者理解能力の認知発達モデルを提起している。

本論文の特色は、以下の3点にまとめられる。

- (1) 言語によらない動的相互作用場面の解析は、方法論の制約によりこれまで検証が難しかったが、独自の実験手法を考案することにより斬新なデータを収集することに成功し、当該分野における新たな方法論を提唱した
- (2) 運動機能が十分成熟していない乳児の行動の背後にある認知機能を解明すべく、先行研究の知見と自身による実証データを多角的に積み上げ、他者理解の個体発生にかんする研究領域に理論的インパクトをもたらした
- (3) 乳児—大人の行動生起の時系列的関係を示した基礎的知見から、養育場面における大人側の行動および心的状態の推定が可能となり、養育ストレス等の問題解決、育児支援への貢献可能性を示した

第1章では、乳児—大人の相互作用でみられる特徴を概観し、他者の行為目的や意図理解等、乳児期に顕著に獲得される社会的認知機能との発達の関連を検討した。先行研究では乳児—大人の双方向的側面が見過ごされてきたことを指摘し、検討すべき問題を明確に提起した点に、本論文の着眼点の斬新さがみてとれる。

第2章は、前章で掲げた問題に対する実証的検討である。乳児が自らの関心を指さしによって相手に伝える際、相手の心的状態を推測して行動を自発的に調整している事実を実証し、乳児期の社会的認知発達理論に新たな貢献を果たした。

第3章では、大人の行動に含まれる要素のうち、乳児が何を選択、学習するかを2つの実証研究を通じて解き明かしている。これまで、乳児は他者の行為目的を合理性原理に基づき認知すると考えられてきたが、実際には、アイコンタクトや声かけ、笑顔等の社会的シグナルにもとづき、行為目的の理解を文脈に応じて柔軟に変えることを実証した。先行研究に一石を投じた注目すべき成果である。

第4章では、乳児—養育者間の動的相互作用を解析する新たな手法を提案し、両者の行為の時系列的変遷を解き明かした。大人は、乳児の潜在能力を即時的に評価し、行動の調整を行っていることを実証した。当該分野において、養育者の「足場づくり (scaffolding)」と呼ばれてきた概念を実証的に裏づけた、貴重な成果といえる。

第5章では、第2～4章の知見を整理し、乳児—大人の動的相互作用の双方向的側面、および乳児の社会的認知機能の発達に与える影響について論じている。両者の相互作用の特徴のひとつは、大人の誇張的働きかけであること、ただし、そうした特徴的な働きかけは、乳児により引き出されている部分が多いこと、双方向的なやり取りを通じ、乳児は他者の行動や心的状態を共有、蓄積しながら他者の存在を自己とは独立して理解するようになっていくという概念モデルを提案した点は高く評価できる。また、このモデルにもとづく養育支援への示唆は、本論文の発展可能性を強く示すものである。

本論文の骨子となる研究は、それぞれ『発達心理学研究』、*Infant Behavior and Development*、*Developmental Science* という国内外の一流学術雑誌に掲載され、理論および方法論の両面において斬新な成果をあげてきた。

他方、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (1) 乳児の行動選択の背後にあると想定される表象、認知機能に関する用語の使い方や選択については、より慎重に検討すべきである
- (2) 乳児にとっての相互作用の相手である大人、他者という存在を、第一養育者を軸として、より深く検討する必要がある
- (3) 最終章において、第1章で掲げた問題提起に対する直接的考察を、より深く行う必要がある

しかし、こうした点は、本論文の価値を根本的に減ずるものとは言えない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年2月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降